

特別講演 ゼロから実現した映画製作と配給の軌跡

Do You Believe in Miracles?

ささき めぐみ
佐々木 芽生 Megumi Sasaki

【講師略歴】

札幌市生まれ。青山学院大学仏文科卒。
1987年渡米、以来ニューヨーク（以下、NY）在住。
1990年初め、ベルリンの壁崩壊をきっかけに東欧へ渡り、現地の様子を伝えるエッセイと写真を『読売アメリカ』で連載するなど、フリーのジャーナリストとして活動。1992年、NHK NY 総局勤務。『おはよう日本』で金融情報を伝えるキャスター、世界各国から身近な話題を伝える『ワールド・ナウ』NY 担当レポーター、ニュースディレクターなどを務める。1996年に独立し、NHK スペシャル『世紀を越えて』『地球市場』『同時3点ドキュメント』などの大型シリーズを中心にテレビドキュメンタリーの取材、制作に携わる。2002年、映像制作会社（株）ファイン・ライン・メディア・ジャパンをNYで設立。2008年、初の監督・プロデュース作品『ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人』を発表。その後、続編にあたる『ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの』を2013年に日米で劇場公開。現在、捕鯨問題の映画製作に取り組んでいる。

【特別講演にあたって】

佐々木芽生監督（以下、監督）のデビュー作となった映画「ハーブ&ドロシー」は、NYの小さなアパートで暮らす元郵便局員のハーブと元図書館司書のドロシー夫妻が、公務員の給料で世界的なコレクションを築くまでを描いたドキュメンタリー。2人はつつましい給料をやりくりして、1960年代はじめから、当時無名で評価が定まっていなかった若手アーティストの作品をこつこつと収集し続けた。30年後、アーティストの多くは大成功して世界的に有名になり、夫妻の1LDKのアパートは2000点あま

りの美術作品で埋め尽くされ、2人は世界有数のアート・コレクターとして知られるまでになる。その価値数百万ドルと言われた「宝の山」を、2人は最後まで1点も売らずに、全てをワシントンDCの国立美術館に寄贈。その後も、結婚当時と同じアパートで、静かに年金暮らしを続けている。

監督がそんなハーブとドロシーのことを知ったのは、同時多発テロの衝撃が残る2002年2月。日本のテレビ番組に向けて有名アーティストの取材をしている時だった。国立美術館でアーティストの展覧会を撮影したのだが、実は、それは2人が同館に寄贈したコレクションの一部だった。その時、初めて2人の存在を知って、心臓に衝撃を覚えるほどの感動を受けたという。公務員の給料で世界的なコレクションを築いたのも驚異的だが、価値ある作品を1点も売らなかったことに、さらに驚いた。

アートと言えば多額のお金が動く世界。そこで、ただ純粋にアートを愛し、数点売れば裕福な生活ができたのに、最後まで1点も売ることなく国立美術館に寄贈、そしてNYの小さなアパートで静かに年金暮らしをする。そんな聖人のような夫婦が実在するのか。幸せな人生とは何なのか？ 豊かさとは、お金や社会的地位とは関係なく、情熱を持ち続けることではないか、そんなことを考えさせられた。

約2年後の2004年、監督はあるパーティーでお2人に偶然出会って「運命」を感じ、1週間後、夫妻の自宅を訪ねた。何とか2人の物語を1人でも多くの人に伝えたいという一心から、映画制作の経験もアートの知識もないまま、カメラを回し始めた。

2人は、映画制作にすぐ承諾してはくれたものの、最初はなかなか心を開いてくれなかった。監督

は、子供がいない老夫婦を頻繁に訪れ、金魚にえさをやったり、いっしょに食事をしたりして関係を築きながら、少しずつ2人との距離を縮めた。最初は、手持ちのデジカメで30分程度の短編を半年か1年で完成させるつもりだったが、そのうち、夫妻は、アートの歴史に残されるべき貴重な存在とわかり、本腰を入れて長編映画にしようと決意。

しかしながら、初めての映画制作だったので、何も知らずに突っ走り、随分痛い目にもあった。映画製作と配給は、湯水のようにお金が流れていく。結局NYのアパートを抵当に入れて銀行から制作費を借金。資金面以外にも、数え切れない難題をクリアして、完成するまでに4年かかった。

監督には、映画監督になるという願望も予定もなかったにも関わらず、映画完成と配給にこぎ着けた点がユニークである。

完成した映画「ハーブ&ドロシー」は、30を超える映画祭に正式招待され、米最大のドキュメンタリー映画祭、シルバー・ドッグス、ハンプトンズ国際映画祭などで、合計5つの最優秀ドキュメンタリー賞や観客賞を受賞。また、2009年6月、NYでの封切り後、ドキュメンタリー映画としては異例の17週を超えるロングランを記録した。その後、全米60都市、100を超える劇場、美術館で公開されたほか、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど世界各地の劇場で公開、また世界各地のアートフェアや美術館で今も上映が続いている。

ところが、この作品を監督の母国、日本で上映しようとした際、再び大きな障害に遭遇した。

配給先を捜す過程で、「アートのドキュメンタリー映画では、観客動員は無理」と、配給会社から軒並み断られる。「では、自分たちで配給しようではないか」、映画の素晴らしさに惚れ込んだ有志の応援団が立ち上がり、日本公開に向けて草の根運動が始まった。上映を後押しするイベントや先行上映

会を各地で開催したほか、ツイッターなどのSNSをフル活用して広告費ゼロで宣伝活動を続ける。

2010年11月13日、渋谷の単館劇場の老舗「イメージフォーラム」での封切り日には、オープンの1時間前から劇場前に長蛇の列ができ、全ての回のチケットがあつという間に売り切れた。結局、「ハーブ&ドロシー」は、同劇場の公開2週間の観客動員記録を更新。歴代2位の興行成績を収めるなど異例の成功を収め、全国50館で公開された。

この作品を鑑賞したあるブロガーのコメント
～この映画には、周りの人にこの映画のことを教えてあげて、そしてみんなでこの映画の心地よさを共有したいって思わせる何かがあると思うのです。そして、みんなでその感動を共有すると、ちょっとホンワカした気分になれるのです～

また、監督は、あるニュースサイトのインタビューで、これから映画制作にトライする人たちへのアドバイスとしてこう答えている。

～努力すること。許すこと。感謝すること。敵を作らないこと。勝つための争いをしないこと。常に自分の内側の声に耳を傾け、それに従って行動すること。問題や制約はむしろ歓迎すべきもの。なぜなら、それを乗り越えることで、自分は成長し、新たな地平を見ることができるから～

なぜ監督は、知識も経験もないままに映画製作へと突き動かされ、作品を完成・配給できたのか？そして、配給会社に頼らず、いかに自主配給を実現したのか？ 特別講演では、監督業に加えて多大な資金集めや大勢のスタッフ管理、宣伝・配給という全てをこなすプロデューサー業をも背負いこんだ奮闘の軌跡を語っていただく予定。

(監督への取材をもとに学会長が記載しました。)